

1月9日（土）総長先生の授業（研修会）に参加して学んだこと。

社会福祉学部 学部長補佐・准教授
人文科学修士 堀 肇

1月9日（土）に行われた総長先生の授業は、臨床心理士試験対策に関するものであった。以前は、多くの合格者を排出していたが、近年は合格者がほとんど出なくなったということであったが、総長先生の授業に参加してその理由が分かった気がした。

総長先生の授業は、試験に合格するためには何をすべきか、最も効率的で最短で合格するための方法は何か明確になっていた。研修会で何度もおっしゃっていたが、「難しいことを簡単にしてあげること」が教師の役目である。臨床心理士試験はもとより、社会福祉士、精神保健福祉士国家試験も、出題範囲が広く、大抵の学生は勉強を始める前にくじけてしまいそうになる。このような学生たちに、合格への道筋を分かりやすく示してあげることが大事である。つまり、何をすればいいのか。必ず合格できると思わせるような指導をして、学生がやる気になって取り組むように導くことが重要であるということだ。

総長先生の授業は、一つひとつの選択肢について、どこが間違っているのかを明確に理解させ、それをそのまま暗記すればいいのだということを強調されていた。私たち教員は、どうしても間違っている箇所やポイントについてさらに説明をしたがる。それは、ポイントに付随したことも理解しなければ試験に対応できないと考えてしまうからだ。しかし、それはむしろ覚えることや理解すべきことを増やしてしまうことになり、却って学生のやる気を無くしてしまうことになりかねない。つまり、「難しいことを難しくして」教えてしまうのである。暗記とは、文字通りそのまま覚えることであり、暗記を繰り返し、積み重ねて行くにしたがって、理解も進んでいくと考える方が、学生にとって負担は少なく、先に進もうという気持ちになるのだ。総長先生の授業は、説明をせずに分かりやすく暗記の仕方を示しており、学生にとっても苦勞することなく頭に入っていくのではないかと感じた。さらに最後の確認テストで全員が満点を取れることによって、学生に自信をつけさせ、合格へと突き進んでいくことができる。

総長先生の授業を受けて、自分自身の国家試験対策を振り返ると、やはり、まだまだ余計なことを話して、学生を不安にさせているのではないかと反省させられた。また暗記するには忍耐が必要であるが、学生がそれに耐えて合格を目指せるよう、教員は激励し、指導していくことが重要であることも実感できた。新型コロナウイルス感染症の影響で、大学を取り巻く環境は、ますます厳しくなっていく。このような中、東京福祉大学は学生の将来を第一に考え、希望する資格、試験に合格をして、目標を達成してあげることのできる大学として生き残っていかなければならない。そのためにも、自分が担当する社会福祉士・精神保健福祉士国家試験の合格者数を増やすべく、今回の研修で学んだことを活かしていきたい。